

学生による授業評価の規定因の検討(2)¹⁾

— 成績の判定基準が授業評価に与える影響 —

牧野 幸志

Determinants of Student Ratings of Teaching (2).

— The effect of evaluation of the standard for grade
on students ratings of teaching —

Koshi Makino

Abstract

The purpose of this study was to investigate the determinants of student ratings of teaching. Ninety-three undergraduate students took part in a survey by completing a questionnaire. The analyses were conducted according to the data (Makino, 2002a). The data was analyzed through multivariate analysis. The results of the path analysis are as follows: (1) "Evaluation of class contents" and "evaluations of teachers attitudes" were positively correlated with overall ratings of teaching and student satisfaction with the class. (2) "Evaluation of preparations for the class" and "evaluation of the standard for grade" had little effect on student ratings of teaching and satisfaction with the class. These findings suggested that the class contents and teachers attitudes in class were very important parts of student ratings of teaching. These findings supported Makino (2001c).

Key words : student ratings of teaching 学生による授業評価, satisfaction with the class 授業への満足度, the standard for grade 成績の判定基準, multivariate analysis 多変量解析.

問 題

近年、日本においても多くの大学で学生による授業評価が行われるようになってきている(牧野, 2001a, b, c, 2002a, b; 松田・三宅・谷村・小嶋, 1999; 三宅, 1999)。日本においては、依然として学生による授業評価を疑問視する意見も多い。しかしながら、近年、大学の大量化が進み、「大学生の学力低下」が問題となる中、大学教員の指導力の向上が望まれている。したがって、学生の理解の程度を知るため、授業の自己点検のため、さらには授業の改善のために授業評価が行われるのが一般的となっている(井上, 1993;

¹⁾ 本研究は、平成13年度私学共済補助金「教育・学習方法等改善支援経費」の補助を受けた。

松田他, 1999; 大槻, 1993; 安岡・高野・成嶋・光澤, 1986; 安岡・吉川・高野・峯崎・成嶋・光澤・道下・香取, 1989a, b)。

安岡他 (1986), 安岡他 (1989a, b) は, 学生の授業評価と成績との関連は低いことを報告している。また, 松田他 (1999) は, 学生による授業評価と自己評価, 授業選択態度, 及び成績との関連を検討している。それによると, 自己評価は学生による授業評価と高い正の相関を示した。また, 成績の悪い学生は授業評価が低い, 女性の方が男性よりも授業評価が高い, ということが明らかとなっている。牧野 (2001a, b) は, 松田他 (1999) の調査項目などに改善を行ない, 授業評価項目リスト, 自己評価項目リストの作成を行なっている。牧野 (2001a) は, 学生による授業評価項目に「授業の内容評価因子」, 「教員の授業態度評価因子」, 「授業の形態評価因子」の3因子を抽出している。授業の内容評価因子は“授業の内容は興味を持てるものであった。”など授業内容の評価に関する因子である。教員の授業態度評価因子は“教員は学生の意見や質問に十分に答えていた。”など教員の授業態度の評価に関する因子である。授業の形態評価因子は“黒板や視聴覚教材 (OHP, スライド, ビデオ, OHCなど) を効果的に使っていた。”など授業の形式あるいは形態の評価に関する因子である。いずれの授業評価因子も授業への満足度と強い正の相関関係にあり, 授業評価が高い学生は満足度も高かった。

また, 牧野 (2002a) では, 牧野 (2001a, b), 西浦・牧野 (印刷中) を参考に調査項目をいくつか加え, 授業評価の構造を検討している。その結果, 牧野 (2001a) と同様の「授業内容評価因子」, 「教員評価因子」の2因子の他に, 授業の準備, 教員の準備に関する「授業準備評価因子」と成績の判定基準, その事前提示に関する「成績基準評価因子」がみられた。授業準備評価因子は, “この授業は, 十分な準備がなされていた”, “担当教員は, 十分に授業の準備を行っていた”などの項目に負荷が高く, 授業内容に影響を与える授業の準備とその準備を教員が行っているかという点で授業内容と教員の評価に関連していた。他方, 成績基準評価因子は, 成績評価の基準が明確か, 事前に知らされていたか, 公正であったかに関する評価であった。これは, 成績を評価する基準を示すものであり, 受講生である学生は事前に知っておきたい情報である。この因子は, 牧野 (2001a, b, c) においてはみられておらず, 授業の総合評価や授業への満足感にどのような影響を与えているかがまだ明らかとなっていない。

牧野 (2001c) は, 牧野 (2001a, b) により得られた授業内容評価, 教員評価, 授業の形態評価の各因子と学生の授業への満足度との因果関係を多変量解析により検討した。そ

の結果、学生は、授業の内容と担当教員の授業態度を評価して、総合的な判断を行ない、満足を感じていることが明らかとなった。つまり、授業の総合的な評価を規定するものは、授業の内容と教員の授業態度であった。ところが、牧野（2002a）においては、これら授業内容、教員の評価の他に授業準備評価、成績基準評価の因子が新たにみられた。したがって、これらの2因子が授業の総合評価、授業への満足度にどのような影響を与えているかを調べる必要があるだろう。

本研究は、牧野（2002a）のデータを再分析し、学生による授業評価の各因子と授業の総合評価、授業への満足度との因果関係を検討する。特に、牧野（2002a）で新たに抽出された成績基準評価の影響をみていく。それは、受講生である学生にとり、どのような基準で成績がつけられるかは関心のあることであると思われるからである。総合評価と満足感に影響を与える要因として、授業評価の4因子（教員評価、授業内容評価、授業準備評価、成績基準評価）を取り上げる。さらに、総合評価に影響を与える要因を牧野（2001c）と比較する。分析方法は、牧野（2001c）と同様の多変量解析を用いる。

方 法

対象授業と被調査者

香川県内の私立T短期大学における平成12年度後期の専門必修科目「社会心理学」（1年生対象）を対象とした。被調査者は、この授業の受講生93名（男性1名、女性92名、平均年齢19.13歳、年齢幅18～20歳）であった。授業は講義形式であり、授業日時は、毎週金曜日3校時（12：50～14：20）であった。クラスサイズは、毎回90名程度であった。担当教員は、男性（教育歴1年6ヶ月）であった。出席はカードリーダーにより管理されており、教員が点呼してとることはなかった。

質問紙の構成

学生による授業評価 松田他（1999）、牧野（2001a, b）、西浦・牧野（印刷中）を参考に新たに項目を作成した（21項目）。それぞれの評価項目に対して、「まったくそう思わない」～「非常にそう思う」の5段階で評定を求めた（1～5点）。また、その他に総合評価を0～10の11段階で評定してもらった。得点が高いほど評価が高いことを示す。

満足度 授業評価と総合評価を考慮して、この授業への満足度を0～10の11段階で評定してもらった。得点が高いほど対象授業への満足度が高いことを示す。

手続き

平成12年12月22日の「社会心理学」の期末試験終了後約15分間を用いて授業評価を行った。調査は、「授業に関するアンケート」という形式で実施した。実施の際に、授業評価は成績評価に関連しないことを強調した。

結果

本研究は、授業の総合評価と授業への満足度に影響を与える要因を特定し、その規定因を多変量解析により検討することが目的であった。規定因として、牧野（2002a）による教員評価、授業内容評価、授業準備評価、成績基準評価を設定した。分析は、次の手順で行なった。まず、授業評価の各因子が授業の総合評価に与える影響を検討した。次に、授業評価の各因子が授業への満足度に与える影響を検討した。最後に、総合評価、満足度を規定する授業評価要因の特定を行なった。

授業評価因子と総合評価、満足感との因果関係

授業評価の4つの因子と学生による授業の総合評価との因果関係を検討するために、総合評価を目的変数とし、授業評価の因子である教員評価、内容評価、準備評価、成績基準評価を説明変数とした重回帰分析を行なった（Table 1）。本研究では、1名を除き被調

Table 1 授業評価因子を説明変数とする重回帰分析の結果

	目的変数	
	総合評価	満足度
R^2 係数	.65**	.59**
説明変数		
授業評価因子		
教員評価	.31**	.29**
授業内容評価	.62**	.51**
授業準備評価	-.12	.06
成績基準評価	.06	.02

表内の数値は、 β 係数を示す。

$N = 93$, ** $p < .01$

査者がすべて女性であったため、男女別の分析は行わず被調査者全体で重回帰分析を行った。

授業評価因子を説明変数、総合評価を目的変数とした場合、決定係数は.65 ($p < .01$)であり、非常に高い値であった。内容評価と教員評価が有意に寄与しており、授業内容の評価と教員の評価が総合評価を正の方向で有意に予測していた。重回帰分析の結果に基づき、パス解析を行なった。標準偏回帰変数が1%水準で有意なパスを示したものがFigure 1のパスダイアグラムである。授業内容の評価と教員評価は、総合評価に対して正の有意なパスを示しており、授業の内容と教員の授業態度を高く評価するほど、総合評価が高いことがわかる。他方、授業準備評価と成績基準評価は総合評価に対して、ほとんど影響を与えていなかった。

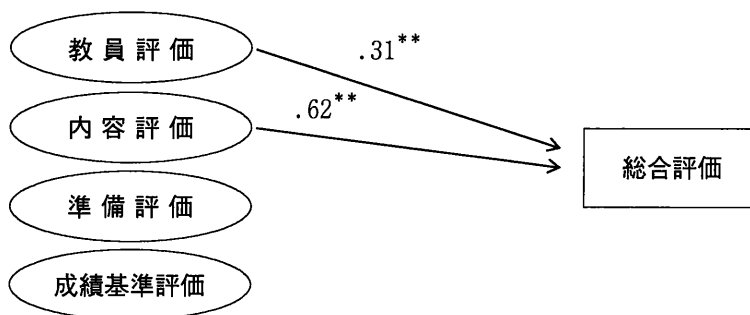


Figure 1. 授業評価因子と総合評価のパスダイアグラム

注) 標準偏回帰係数が有意なパスのみを図示した。図中の数字は有意な標準偏回帰係数を、実線矢印は正のパスを示す。

$N = 93$, ** $p < .01$

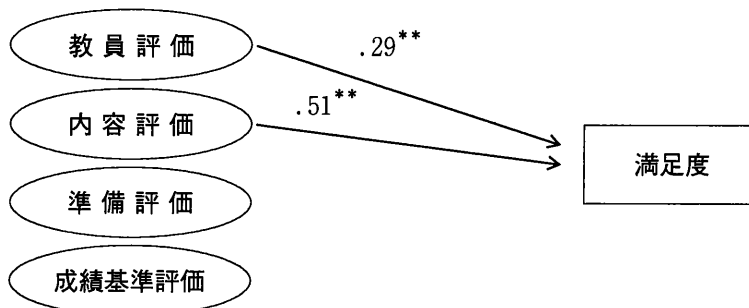


Figure 2. 授業評価因子と満足度のパスダイアグラム

注) 標準偏回帰係数が有意なパスのみを図示した。図中の数字は有意な標準偏回帰係数を、実線矢印は正のパスを示す。

$N = 93$, ** $p < .01$

次に、授業評価因子を説明変数、授業への満足度を目的変数とした分析の結果、決定係数は.59 ($p < .01$) であり、高い値であった。内容評価と教員評価が有意に寄与しており、授業内容の評価と教員の評価が授業への満足度を正の方向で有意に予測していた。重回帰分析の結果に基づき、パス解析を行なった。標準偏回帰変数が1%水準で有意なパスを示したものがFigure 2のパスダイアグラムである。教員の評価と授業の内容評価は、満足度に対して正の有意なパスを示しており、教員の評価が高いほど、また、授業の内容を高く評価するほど、満足度が高くなることを示している。他方、授業準備評価と成績基準評価は満足度に対しても、ほとんど影響を与えていなかった。

総合評価、満足度を規定する要因

授業評価の各因子が総合評価、満足度に対してどのような影響を及ぼしているのかをより明確に検討するために、重回帰分析を行なう際に投入する説明変数を変更した。授業評価の4因子を投入した結果、説明率は高かったが授業準備評価因子と成績基準評価因子の寄与は小さかった。そこで、これらを除いた教員評価因子と授業内容評価因子の2因子を投入して重回帰分析を行ない、4因子の場合と比較した。

総合評価 教員評価因子と授業内容評価因子を説明変数、総合評価を目的変数とした場合、決定係数は.63 ($p < .01$) であり、非常に高い値であった (Table 2 参照)。2つの因子ともに有意に寄与しており、総合評価を正の方向で有意に予測していた。教員評価と授業内容評価は、総合評価に対して強い正の有意な寄与を示しており、教員の授業態度を高

Table 2 授業評価因子の総合評価への影響に関する回帰分析

説明変数	従属変数	総合評価 (4因子投入)	総合評価 (2因子投入)
授業評価因子			
教員評価		.31**	.29**
授業内容評価		.62**	.58**
授業準備評価		-.12	
成績基準評価		.06	
R^2 係数		.65**	.63**

表内の数値は、 β 係数を示す。

$N = 93$, ** $p < .01$

く評価するほど、授業の内容を高く評価するほど、総合評価が高くなることがわかる。決定係数、標準偏回帰変数ともに、4因子投入したときとほぼ同じ値であった。つまり、授業準備評価因子、成績基準評価因子を除いても総合評価の説明率はほとんど変わらなかった。

満足度 教員評価因子と授業内容評価因子を説明変数、授業への満足度を目的変数とした場合、決定係数は.58 ($p < .01$) であり、高い値であった (Table 3 参照)。2つの因子ともに有意に寄与しており、満足度を正の方向で有意に予測していた。教員評価と授業内容評価は、満足度に対して強い正の有意な寄与を示しており、教員の授業態度を高く評価するほど、授業の内容を高く評価するほど、授業への満足度が高くなることがわかる。決定係数、標準偏回帰変数ともに、4因子投入したときとほぼ同じ値であった。授業準備評価因子、成績基準評価因子を除いても授業への満足度説明率はほとんど変わらなかった。

考 察

本研究の目的は、学生による授業評価の各因子と総合評価、授業への満足度との因果関係を明らかにすることであった。特に、牧野 (2002a) で新たに抽出された成績基準評価が総合評価に与える影響を検討することであった。

まず、重回帰分析とパス解析を用いて、授業評価の各因子と総合評価との関連を検討した。その結果、教員の評価と授業内容の評価が総合評価に大きな影響を与えていた。授業

Table 3 授業評価因子の満足度への影響に関する回帰分析

従属変数 説明変数	満足度 (4因子投入)	満足度 (2因子投入)
授業評価因子		
教員評価	.29**	.31**
授業内容評価	.51**	.54**
授業準備評価	.06	
成績基準評価	.02	
R^2 係数	.59**	.58**

表内の数値は、 β 係数を示す。

$N = 93$, ** $p < .01$

の内容を高く評価するほど、また、教員の授業態度を高く評価するほど、学生の授業に対する総合評価が高いことが明らかとなった。つまり、受講生は、教員の授業態度、授業の内容を見て、授業を総合的に評価していることがわかる。この結果は、牧野（2001c）と同様であった。他方、授業の準備に関する評価と成績の判定基準に関する評価は、総合評価に関連していなかった。成績判定の基準を明確にすること、基準を事前に告げることは受講生にとって重要と思われたが、授業の総合評価にはほとんど影響を与えていなかった。

次に、重回帰分析とパス解析を用いて、授業評価の各因子と授業への満足度との関連を検討した。その結果、総合評価の場合と同様に、教員の評価と授業内容の評価が満足度に大きな影響を与えていた。教員の授業態度を高く評価するほど、また、授業の内容を高く評価するほど、学生の授業への満足度が高いことが明らかとなった。つまり、教員の授業態度と授業の内容を高く評価した学生は、授業に満足していた。他方、授業の準備に関する評価と成績の判定基準に関する評価は、満足感に影響を与えていなかった。成績判定の基準を明確にすること、基準を事前に告げることは学生の授業への満足度にもほとんど影響を与えていなかった。

本研究に用いた授業評価因子の中で、授業準備因子、成績基準評価因子は総合評価、満足度に対してほとんど影響を与えていなかった。このことをより詳細に検討するために、授業評価の4因子すべてを説明変数とした重回帰分析の結果と教員評価因子、授業内容因子のみを説明変数とした重回帰分析の結果とを比較した。その結果、総合評価に関しては、標準偏回帰係数はほとんど変わらず、重相関係数もほとんど変わらなかった。授業への満足度に関しても標準偏回帰係数、重相関係数ともに変化がみられなかった。このことから、授業の総合評価にとって重要な要因は、教員の授業態度と授業の内容であることがあらためて明らかとなった。また、学生の授業への満足度も教員の授業態度、授業の内容によって決まることが示された。成績の評価基準とその明示は、授業の総合評価と授業への満足感には影響を与えていなかった。

本研究の今後の課題として、成績判断基準の重要性の検討があげられる。本研究では、成績基準とその明示が授業評価に影響を与えないこと、授業への満足感に関連のないことが示された。しかしながら、受講生にとってどのような基準で成績が判定されるのかは重要な関心事であり、その基準があらかじめ知らされることは当然望むことであろう。成績判定の基準が学生にとってどの程度重要であるかをその重要度を測定することにより確認する必要があるだろう。

引用文献

- 井上正明 1993 学生による授業評価の方法論的考察—大学の授業評価に関する実証的研究(8)—
福岡教育大学紀要, 42, 277-291.
- 牧野幸志 2001a 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係—教養選択科目
「社会心理学」の場合— 高松大学紀要, 35, 1-16.
- 牧野幸志 2001b 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係—専門必修科目
「人間関係論」の場合— 高松大学紀要, 35, 17-31.
- 牧野幸志 2001c 学生による授業評価の規定因の検討(1)—多変量解析を用いた因果モデルの検討—
高松大学紀要, 36, 55-66.
- 牧野幸志 2002a 学生による授業評価, 満足感と成績との関係—成績の悪い学生は本当に授業を酷
評するのか?— 高松大学紀要, 38, 印刷中.
- 牧野幸志 2002b 学生による授業評価, 満足感と単位修得との関係—単位不認定の学生は, 授業に
不満を抱くのか?— 高松大学紀要, 38, 印刷中.
- 松田文子・三宅幹子・谷村 亮・小嶋佳子 1999 学生による授業評価と自己評価, 授業選択態度,
及び成績の関係—教職必修科目「生徒指導論」の場合— 広島大学教育学部紀要 第一部(心理
学), 48, 121-130.
- 三宅幹子 1999 大学生における授業選択態度のタイプと授業評価, 自己評価, 及び成績の関係
広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), 48, 141-148.
- 西浦和樹・牧野幸志 2002 教師の実践的力量向上のための授業改善の試み—学生による授業評価
の要因分析— 日本教育工学会誌, 印刷中.
- 大槻 博 1993 多摩大学の学生による授業評価「ボイス」をめぐる考察 一般教育学会誌, 15,
47-49.
- 安岡高志・高野二郎・成嶋 弘・光澤舜明 1986 学生による講義評価 一般教育学会誌, 8, 46
-59.
- 安岡高志・吉川政夫・高野二郎・峯崎俊哉・成嶋 弘・光澤舜明・道下忠行・香取草之助 1989a
学生による講義評価—学生の質と講義評価の関係について— 一般教育学会誌, 11, 56-59.
- 安岡高志・吉川政夫・高野二郎・峯崎俊哉・成嶋 弘・光澤舜明・道下忠行・香取草之助 1989b
学生による講義評価—成績と講義評価の関係— 一般教育学会誌, 11, 99-102.